

跡見学園を去るに当って

蒲原 春一

平成三年三月末日をもって定年退職することになるこの機会に、永い間御世話になった教職員の方々を始め、学生諸君に御挨拶申したいと思ひます。始めて跡見学園の教壇に立ったのは非常勤講師として昭和二十二年のことですから以来四十四年、途中一年少々、米国の大学に勤め研究生生活を送った以外は、跡見女学校、中学、高校そして短大と御縁が続きました。昭和四十年、四年制の女子大学が設置されるについて、専任として来て欲しいとのことで、それまで二十年間在職した東京大学理学部を辞任し、跡見学園女子大学の教壇に立つことになりました。以来大学と共に過して二十六年、考えて見ると、それまで殆んど専門の生物学の研究にのみ時間を過してきた者が教育者として永らく大過もなく勤めてこられたものと思ひます。

大学に入った最初は、机以外には何もない研究室に定められた標準設備をととのえねばならないことと、文学部系の学生諸君を相手にいかに自然科学系の科目を興味をもって勉強してもらうか必死の時間を送りました。約十年を経過、やっと何とか目鼻がついた昭和四十九年には、新に文化学科を設立するについて、自然人類学を担当してくれるよう、当時の伊藤学長から依頼されました。色々お話を伺う中に『フォーラム』の創刊号に書きました通り、人間自身のことを理解するためにも大変有意義な学問であることに思ひ至り、既成の概念に捕われぬ、跡見の「自然人類学」を学生諸君と勉強して行こうと御引受けすることにしました。ちょうど同じこの年、伊藤先生の後任として学長を命ぜられることとなり、新しい講義と管理職を両立せねばならず、私にとって一番厳しい時期であったようです。しかし、この科目に興味を持つ学生諸君が意外に多く、その内容もよく理解してくれていて、

今年で十四回のゼミを持ち、明年春卒業予定の学生を含めて合計三百二十九名（この外、健康やその他の事情で卒業しなかった学生が四名ほどいたのは残念）となります。そして卒業した学生諸君が「卒業は大変苦しかったけれど、学生時代に勉強らしい勉強をした。とてもよい思い出になる」と言っていることは、教師としてもやり甲斐のあったよい思い出となることでしょう。

二十六年の間、研究室の助手として何かと協力してくれた方々、既に結婚して姓の変った方が多いのですが、あえて在職中の姓をあげて、感謝したいと思います。上野和子・松本恵美子・中井まさみ・鈴木慶子・河本敦子・渡辺由理子、以上の方々には本当に感謝しています。最後に自分のことで恐縮ですが、非力な者で何も自慢できることはありませんが、唯一あるとすれば、正月元日ぐらゐを除いて、特別な事情の場合以外は、春夏秋冬休暇中も殆ど毎日研究室に出たことぐらゐでしょうか。

色々機械もあり、実験動物もいたのでやむを得ないのでしようが、我ながらよく出来たものと感心しています。ただ一つ残念だったことは、折角小生の科目を選ぶつもりで二年間頑張っていた学生が、本年度から色々な事情があったのですが、急に方向転換せざるを得なくなりましたことです。そして、自分自身の研究が、片手間では出来ないようなことをやって来ましたので、この大学では殆ど諦めざるを得ない状態だったことも残念でした。今後は時間もあると思うので、これまでの仕事の整理でもして過したいと思っています。

（平成二年十一月記）

（かんばら しゅんいち・自然人類学）